

要 旨

本研究は、中学校英語科において、表現意欲が高まるような題材設定の工夫をし、内容的にまとまりのある一貫した文章を書かせることで、自分の考えや気持ちなどを書く力を高めることを目指したものである。英作文の指導の際にパラグラフ・ライティング指導を取り入れ、英語の文章構成を学ばせ、その構成に添ったアウトラインを作った後に、英語で文章を書くというステップで、自分の考えや気持ちなどを書く活動を行った。その結果、英語で文章を書くことに対する興味・関心が高まり、「内容的なまとまり」を意識して書くことができるようになってきた。

〈キーワード〉 ①パラグラフ・ライティング ②意欲を高める題材 ③内容的なまとまり

1 研究の目標

自分の考えや気持ちなどを書く力を高めるために、各単元計画において、生徒の意欲が高まるような題材の設定と内容的にまとまりのある一貫した文章を書かせるための学習指導の在り方を探る。

2 目標設定の理由

中学校英語科では、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養うことが求められている。新中学校学習指導要領解説外国語編では、「自らの考えなどを相手に伝えるための『発信力』やコミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力などの育成を重視する点から、『聞くこと』や『読むこと』を通じて得た知識等について、自らの体験や考えなどと結びつけながら活用し、『話すこと』や『書くこと』を通じて発信することが可能となるよう、4技能を総合的に育成する指導を充実する。」¹⁾と述べられている。

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査の中学2年生の結果を見ると、「書くこと」の領域において、十分達成できている生徒と努力を要する生徒の二極化が課題となっており、努力を要する生徒の割合が、44.7%であった。本校の2年生に目を向けてみると、「書くこと」において、概ね達成の生徒の割合は89.4%であった。しかし、課題作文では、わずか10.5%の生徒のみ正答で、まとまりのある一貫した文章を書くことができずに、準正答や誤答になる生徒が多く見られた。また、意識調査では、「ALTの先生とコミュニケーションをとることは好きですか」の問いに94.7%の生徒が「好き、どちらかといえば好き」と答えている。それに対して、「英語を使って、手紙や日記、e-mailなどを書くことに興味がありますか」の問いには、57.9%もの生徒が「どちらかといえばない、ない」と答えていた。以上のことから、「書くこと」に興味がないという生徒の中には、授業で自分の考えや気持ちなどを書く機会が少なかったために「書くこと」に慣れておらず、興味をもてない生徒がいるのではないかと考えられる。

そこで、本研究では、グループの研究テーマ、研究課題を受け、「内容的にまとまりのある一貫した文章を書くこと」に焦点を当て、自分の考えや気持ちなどを書く力を高めるための効果的な手立てを探りたいと考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

中学校英語科の各単元計画において、生徒の意欲が高まるような題材の設定と内容的にまとまりのある一貫した文章を書かせるためのパラグラフ・ライティング指導を行えば、自分の考えや気持ちな

どを書く力を高めることができるであろう。

4 研究の内容と方法

(1) 研究の内容

ア 生徒の意欲が高まるような題材設定の工夫と、内容的にまとまりのある一貫した文章を書かせるためのパラグラフ・ライティングについての理論研究

イ 仮説を検証するために、所属校の2年生においてUnit 5（3時間）とUnit 6（3時間）の単元末を用いた「自分の考えや気持ちなどを書く活動」を取り入れた授業実践（仮説検証型研究）

ウ 研究の有効性の検証及び研究のまとめ

(2) 研究の方法

ア 研究紀要や文献などを通して、生徒の意欲が高まるような題材設定の工夫と、内容的にまとまりのある一貫した文章を書かせるためのパラグラフ・ライティングについて理論研究を行う。

イ 「自分の考えや気持ちなどを書く活動」を取り入れた検証授業を行いその有効性を分析する。（仮説検証型研究）

ウ 「自分の考えや気持ちなどを書く活動」を取り入れた授業の有効性について、課題作文と意識調査を通して検証し、研究のまとめを行う。

5 研究の実際

(1) 文献等による理論研究

新中学校学習指導要領解説外国語編では、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が十分ではないという課題に対応して「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。」²⁾ が書くことの指導事項として挙げられている。

このことから、自分の考えや気持ちなどを書く力を高めるために、内容的にまとまりのある一貫した文章を書かせるための手立てが必要であると考えた。

大井は、「パラグラフとは『書き手が主張したい1つのアイデアについてその主張がはっきりするように論理的展開によってサポートすること』」³⁾ とし、英語の文章の特色として「結束性」と「論理の一貫性」を挙げている。

また、田中は、言語活動において必然性、自己関連性、具体性、自由度を高めることを、生徒の表現意欲を高めるポイントとして挙げている。

これらの理論から、内容的にまとまりのある一貫した文章を書かせるための手立てとしてパラグラフ・ライティングを取り入れ、表現意欲が高まるような題材設定の工夫を行うことで、自分の考えや気持ちなどを書く力を高めることができるのではないかと考えた。

(2) 授業の実際

中学校第2学年で、自分の考えや気持ちなどを書く活動として、10月に「おすすめの季節」（全3時間）と、1月に「わたしの町」（全3時間）で検証授業を行った。

まず、図1を用いてパラグラフについての説明を行い、英語の文章構成に対する知識を習得させるための時間を取った。その後「おすすめの季節」を紹介するためのアイデアや「わたしの町」についての情報をまとめて、日本語のアウトラインを作る活動を行った。

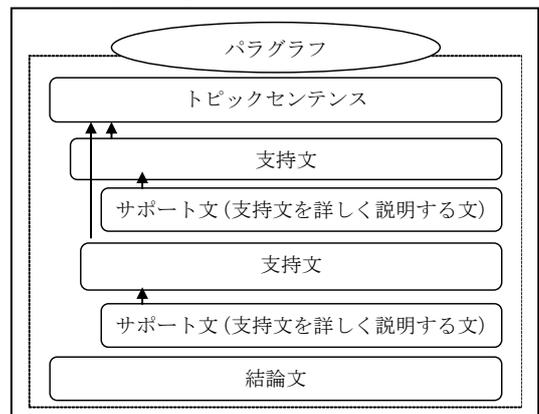


図1 パラグラフの構成

本研究では、英語の文章構成に対する知識と理解を深めさせるために、日本語のアウトラインを取り入れている。次に、日本語のアウトラインを基に英語でアウトラインを作る活動を行い、最後に結束性を高めるために、文章のつながりをよくする言葉について説明し、それらの言葉を使って文章を書き直す活動を行った。このように、大井による「英語でのアウトライン作り」と「結束性を高める活動」の二つの指導過程を取り入れ、「日本語のアウトライン作り」を取り入れて授業を行った。

また、書くことへの意欲を高めるための手立てとして、自己関連性を高めるために、自分たちの住む町のおすすめの季節と場所について紹介する手紙をALTに宛てて書かせた。また、必然性を高めるために、実際にそれらを送って返事をもらう場面を設定した。本校勤務のALTを通じて、市内のALT数名に生徒からの手紙に返事を書いてもらうように依頼をした。生徒たちは、それぞれの検証授業で同じALTに自分の考えたおすすめの手紙について紹介し、返事をもらって読んだ。このように、生徒がどういう内容で書けばいいのかを具体的にイメージしやすいように題材を設定した。

上記の流れで計画を立て、「パラグラフ・ライティングの手法導入による英語の文章構成に対する知識の習得（検証Ⅰ）」「アウトライン作りによる内容の一貫性の高まり（検証Ⅱ）」「文章のつながりをよくする活動による結束性の高まり（検証Ⅲ）」「題材設定の工夫による書くことへの意欲の高まり（検証Ⅳ）」を検証の視点として、6時間の検証授業を実施した。

ア 検証授業①

まず、大井の研究を基に、まとまりのある文章を「ある一つのテーマに関して、始めから終わりまで一つの考えで書かれている文章」と定義し、英語のパラグラフにおける文章構成についての説明を行い、その構成に沿って文章を書いていくことで内容的にまとまりのある文章になることを説明した。次に、英語の文章構成を理解させるために、英語の文章構成に沿って書かれた日本語の文章からトピックセンテンスと支持文を探し、それをアウトラインの形にまとめる練習を行った。その後、「ALTに七山のおすすめの季節を紹介する」というテーマで、紹介したい季節を一つ選ばせ、マッピングを使ってその季節から連想するものを書き出し、アイデアをまとめさせた(図2)。その中からその季節を紹介するための理由として二つか三つのアイデアを支持文として、そこから広がったアイデアをサポート文(支持文を詳しく説明する文)として選ばせ、日本語のアウトラインを作らせた。次に、日本語のアウトラインを基に英語のアウトラインを作らせた。英語を苦手とする生徒にとっては、日本語を英語で表現することが難しく、

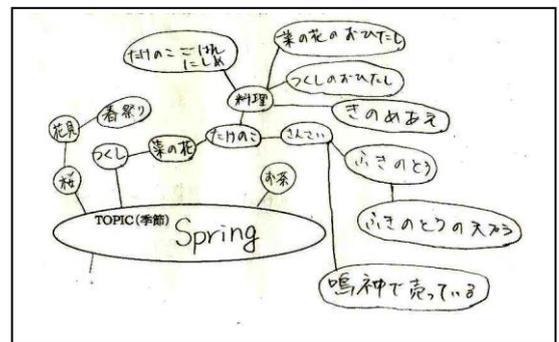


図2 検証授業① 生徒が書いたマッピングシート

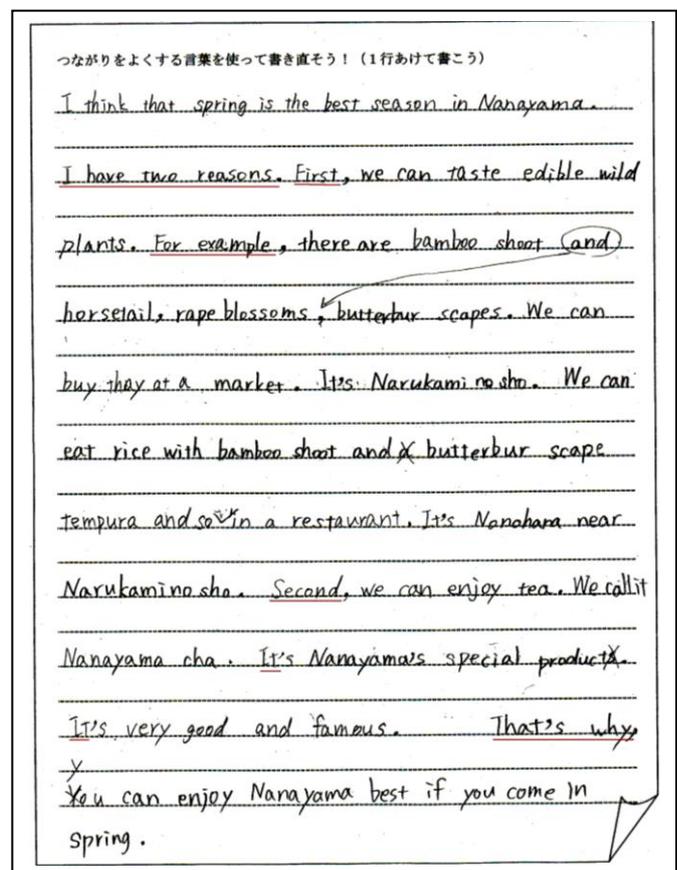


図3 検証授業① つなかりをよくする活動後の生徒作文(下線は教師によるもの)

書き進めることができない生徒もいた。また、中学生が使用する辞書には載っていない単語や、日本独特の言葉でそのまま辞書では引けない単語があり、英語のアウトラインを作ることに時間が掛かった。英語でのアウトライン作成後に教師からフィードバックをするときに多くの修正が入り、英語を書くのはやはり難しいと感じている生徒が多く、課題が残った。英語のアウトラインの修正をさせた後、それを基に英語の文章を書かせた。その後、文章の結束性を高めるために、文章のつながりをよくする言葉の説明を行った。例を示しながら、代名詞、副詞、接続詞、例示の表現を使うことで文章のつながりがよくなることを説明した。また、読みやすい意見文を書くために、トピックセンテンスの後に、“I have ~reasons.”のように理由を提示する表現、First, Second…など順番を使って理由を述べる表現、“For these reasons,”のような結論文を述べる表現を紹介した。その後、自分が書いた文章を、これらの言葉を使いながら書き直す活動を行った（前頁図3）。その結果、副詞やand以外の接続詞、例示の表現を使用している生徒は少なく、書き直した文章の中にもそれらの言葉を使用できる箇所があった。これらの課題を踏まえて検証授業②に取り組んだ。

イ 検証授業②

まず、宿題として調べてきた情報を図4のように情報分類シートを使って整理させた。次に、質の異なる情報が入っていないかを確認させるために、「場所」「客」のようにラベリングをさせた。そして、シートに整理した情報から支持文を考えさせた。その後、支持文とシートに整理した情報を、図5のように日本語のアウトラインの形にまとめさせた。次に、日本語のアウトラインを基に、英語のアウトラインを作らせた。このとき、検証授業①の英語のアウトラインを作る際の課題を踏まえ、生徒ができるだけ英語への苦手意識を感じることなく「内容的にまとまりのある文章を書くこと」ができるようにするためのワークシート「使える表現リスト」と「支援カード」を配付した。「使える表現リスト」には、多くの生徒が使えそうな表現、学習していない単語や言い回し、言い換えを載せた。また、個別に作成した「支援カード」には、中学生の辞書に載っていないような植物や動物の単語や、中学生にとって難しい言葉を日本語で別の表現に言い換えたものを載せた。英語の苦手な生徒には、机間指導をして個別に支援し、グループの中で教え合いをさせるなどの工夫が必要である。英語のアウトラインを基に、文章を書かせ、その後文章のつながりをよくする言葉の復習を行った。検証授業①での課題を受け、文章のつながりをよくする言葉を使って文章

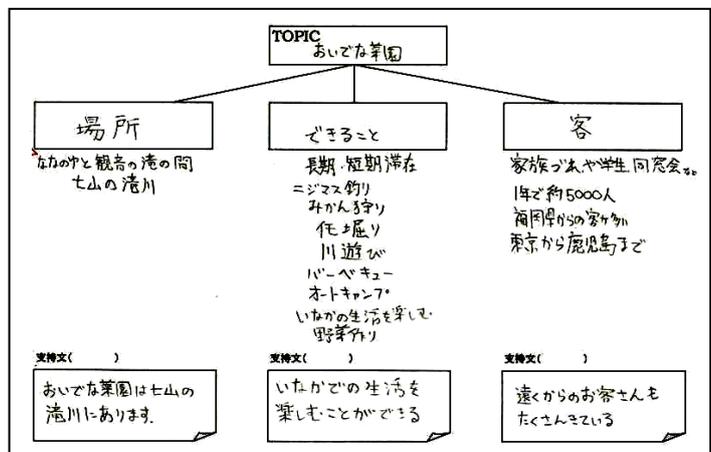


図4 検証授業② 生徒が書いた情報分類シート

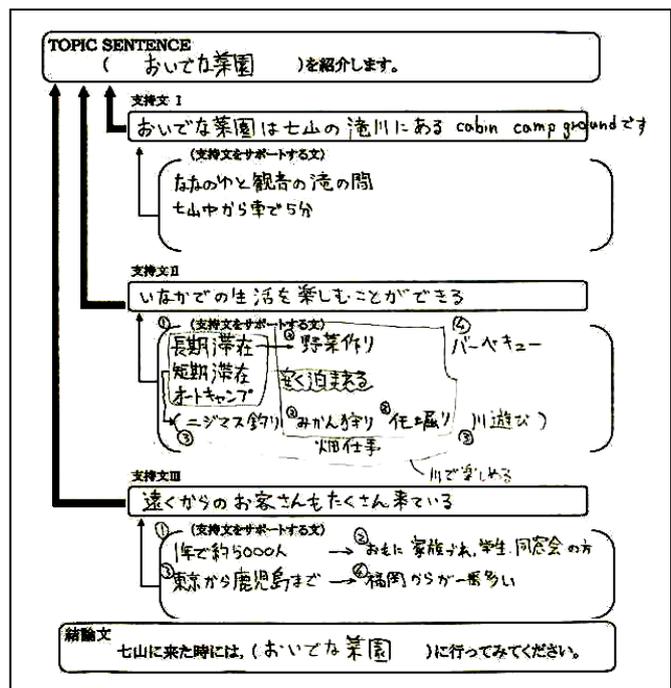


図5 検証授業② 生徒が書いた日本語のアウトライン

の書き直しができるようにするために、2回の練習を取り入れた。1回目は、例題の文章の空所に代名詞、副詞、接続詞、例示の表現を入れる練習を全員で考えながら行った。2回目は、品詞別にワークシートを用いて個人で練習させた。その後、文章のつながりをよくする言葉を使って、自分の文章の書き直しをさせた。

(3) 授業の考察

ア 検証Ⅰ (パラグラフ・ライティングの手法導入による英語の文章構成に対する知識の習得)

検証授業①,

②を通して、日本語のアウトラインで検証した。表1のアのように、支持文が全て適切であればA、イのよう

表1 検証授業① A, B, Cと判断した支持文の例

トピックセンテンス 「七山では秋が一番いい季節だと思います。」			
	例	評価	理由
ア	「紅葉を楽しめます。」	A	紅葉の種類や様子、紅葉を見れる場所などの情報を書くことができる。
イ	「焼き芋を楽しめます。」	B	具体的で狭すぎる。 「秋の味覚を楽しめる」ならA
ウ	「文化祭を楽しめます。」	C	読み手を意識しておらず、七山の秋からは連想できない。

に内容が抽象的過ぎたり、具体的過ぎたりする支持文があればB、ウのように支持文の中に一つでもトピックと合っていないものがあればCと判断した。その結果、検証授業①、②を通して全ての生徒が日本語の支持文を適切に書けるようになった(図6)。しかし、検証授業②でB基準と判断された生徒が増えた。図

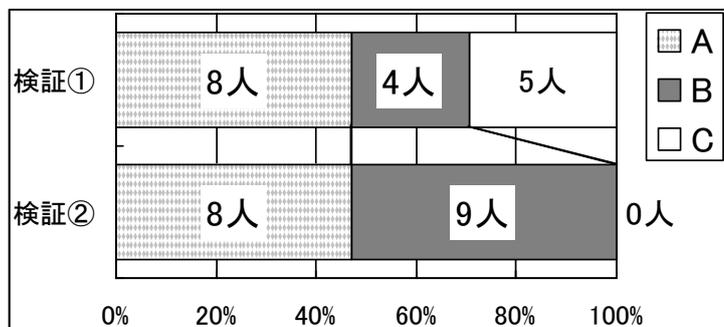


図6 日本語の支持文の適切さ

7は、支持文がサポート文に対して、具体的すぎる例である。このように、サポート文から支持文を作っていく作業は、生徒にとっては難しいことが分かった。

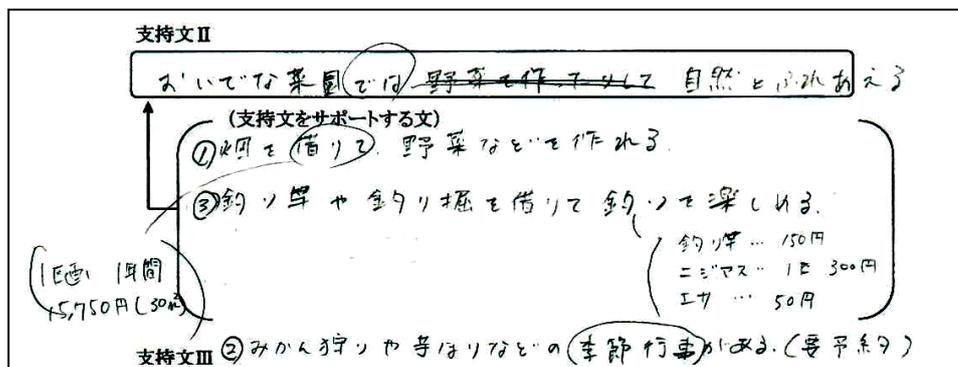


図7 検証授業② 生徒が書いた日本語のアウトライン (一部抜粋)

次に、支持文とサポート文との関係で、英語の文章構成に対する知識が身に付いたかを検証した。サポート文の適切さは表2のように判断した。その結果、次頁図8のように検証授業①、②を通して、サポート文を適切に書くことがで

表2 日本語のサポート文の適切さの評価規準

評価	評価規準
A	支持文と全て関係あり、支持文を説明するために必要な情報が十分に入っている。
B	支持文と全て関係あるが、支持文を説明するために必要な情報が十分に入っていない。
C	支持文と関係ないものがあり、支持文を説明するために必要な情報も十分に入っていない。

きる生徒が増えており、パラグラフ・ライティングの手法を導入することにより、英語の文章構成に対する知識が身に付いてきたと言える。

イ 検証Ⅱ（アウトライン作りによる内容の一貫性の高まり）

日本語のアウトラインを基に作った英語のアウトラインで検証した。英語のアウトラインでは、動詞の間違いや語順の間違いがあっても、内容として適切かどうかを日本語のアウトラインと同じように判断した。その結果、英語の支持文では、検証授業①、②を比べると、A基準の生徒が減り、B基準の生徒が増えた（図9）。分類した情報から支持文を考えなければならず、抽象的、具体的すぎる支持文を日本語のアウトラインの段階で適切に修正できなかったことが、英語のアウトラインにも影響していたと考えられる。

英語のサポート文では、図10のように検証授業②において、全員が支持文と全て関係あるサポート文を書くことができていた。日本語のアウトラインを書き、次に英語のアウトラインを書いたことと、2度の検証授業に取り組んだことで、英語の文章構成に対する理解が深まり、内容的にまとまりのある一貫した文章を書くことができるようになってきたと言える。

ウ 検証Ⅲ（文章のつながりをよくする活動による結束性の高まり）

文章のつながりをよくする活動を通して、代名詞や接続詞などを使いながら結束性の高い文章を書くことができているかを検証した。検証授業①では、理由を提示する言い方や、順番、結論を表す言い方はほとんどの生徒が使うことができていた。しかし、代名詞、接続詞、副詞、例示の表現は書き直した文章の中にも使用

できる箇所があった。検証授業②では、ワークシート等での練習を取り入れた結果、代名詞、接続詞、例示の表現の使用の割合は増えてきた（図11）。代名詞や接続詞などの文章のつながりをよくする言葉を使うことで、文章の結束性も高まり、読みやすい文章になってきたと言える。

エ 検証Ⅳ（題材設定の工夫による書くことへの意欲の高まり）

検証授業前と検証授業後のアンケートの結果、「英語で文章を書いて伝えられるとうれしいですか」

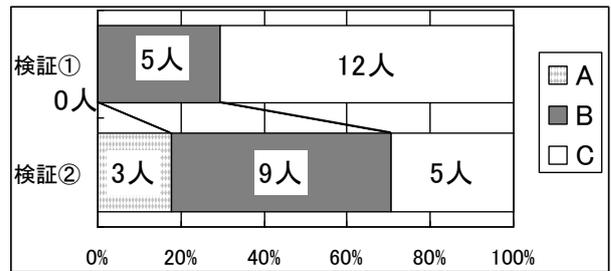


図8 日本語のサポート文の適切さ

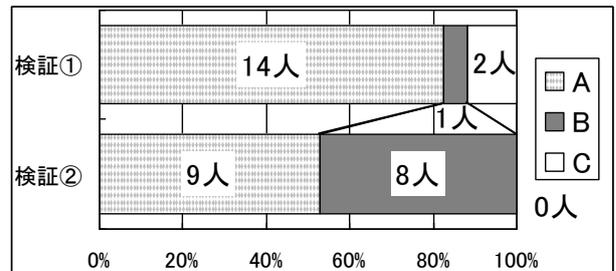


図9 英語の支持文の適切さ

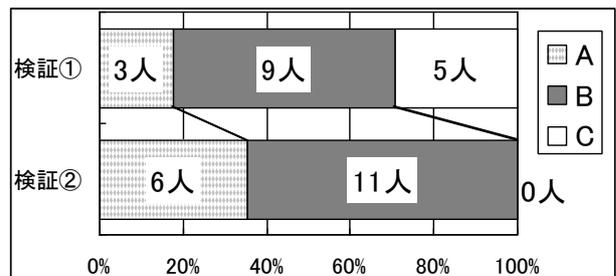


図10 英語のサポート文の適切さ

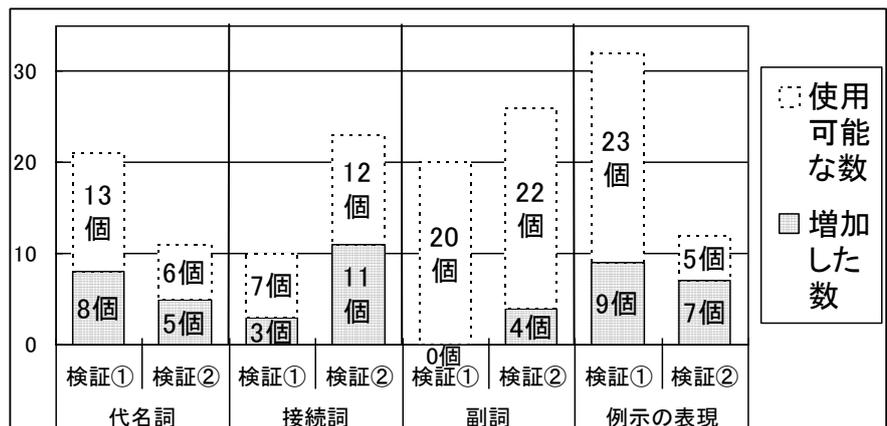


図11 文章のつながりをよくする言葉の使用

と「英語で文章を書いて伝えたいと思いますか」の質問に対して「そう思う」と答えた生徒が増えてきた（図12）。自由記述の生徒の感想の中には、「外国にいる相手に手紙を送りたいと思っているので、相手に伝わりやすい文章が書けるようになりたいです。」や「感想文などを英語で書いてみたいと思います。そしてスラスラ書けるようになったら、外国人の方とも文通ができるようになりたいです。」というように、英語で文章を書くことへの意欲を表す生徒も増えてきた。また「英語で文章を書くことは好きですか」の質問に対しては、「どちらかといえばそう思わない」と答えた生徒の数が減り、89%の生徒が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えて

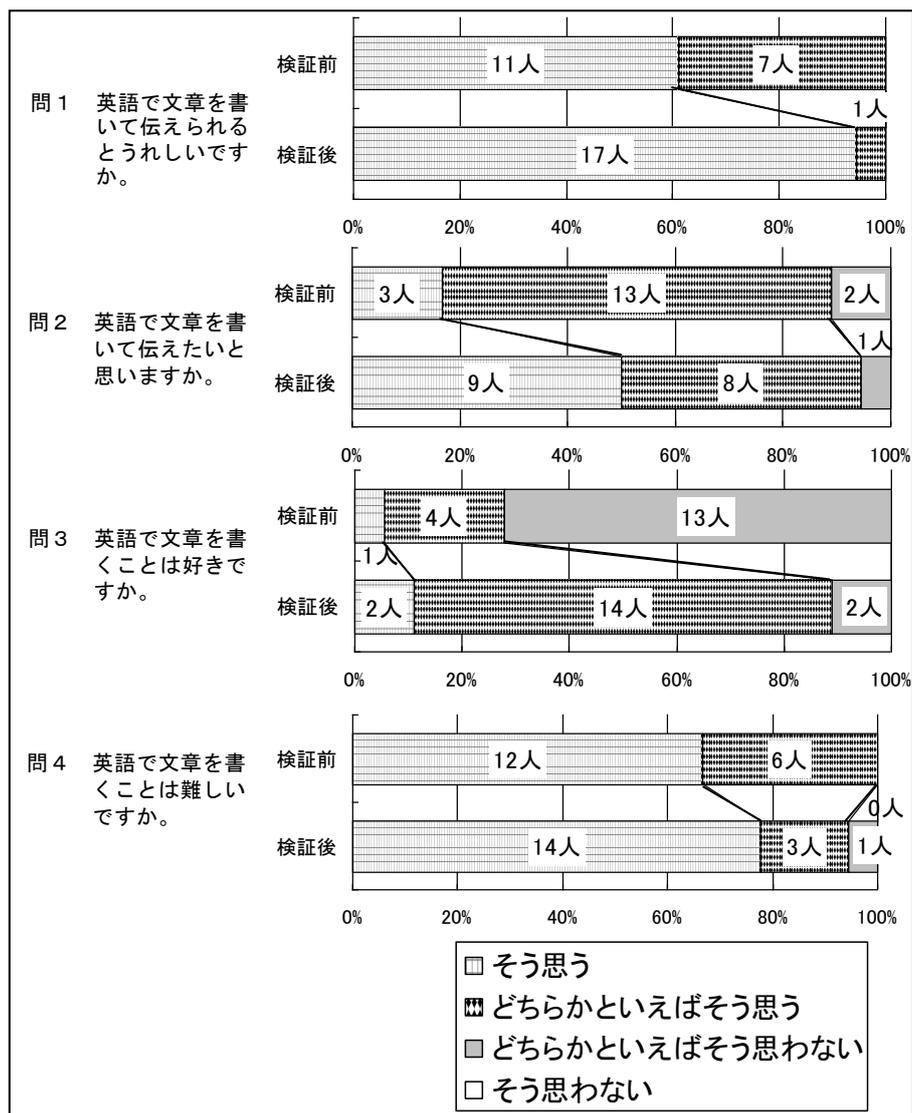


図12 事前と事後の生徒の意識調査

いる。「英語で文章を書くことは難しいですか」の質問に対しては、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた生徒がほとんどで、検証授業後も多くの生徒が英語で文章を書くことは難しいと感じていた。しかし、「日本語を英文にするのはやっぱり難しいけど、前よりもはるかにできるようになった。もっともっと色々な場所を教えたい。」という生徒に代表されるように、英語で文章を書いてみようという生徒が多かった。題材設定の工夫で、英語で文章を書くことへの興味・関心が高まり、書くことへの意欲につながることができていた。

(4) 事前調査及び事後調査

検証授業の前と後に、「身の周りの人の紹介」というテーマで課題作文を実施した。同じ話題で書き進めている文のまとまりの数と、そのまとまりの中の文の数に着目して課題作文を分析した。その結果、事前調査では、同じ話題に対して1文で書いている割合が高かったが、事後調査では、一つの話目に対して1文で書いている割合が減り、2文以上で書いて

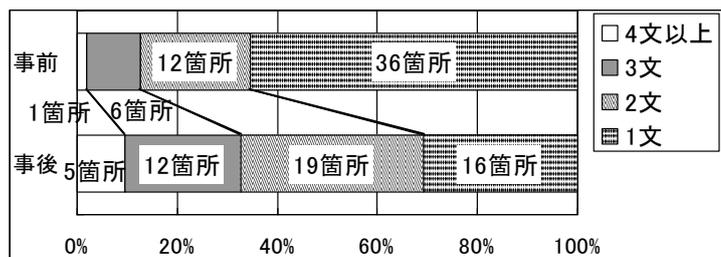


図13 課題作文

いる割合が増えた（前頁図 13）。また、生徒の課題作文を個別に見た場合にも、78%の生徒にそのような変化が見られた。英語の文章構成を理解し、支持文とサポート文との関係に注意しながら、内容的にまとまりのある一貫した文章を書くことができる生徒が増えてきた。

図 14 のように、接続詞を使う回数も事後調査では増えてきており、and や because を使いながら文章の結束性を高めることができていた。

このように事後調査の課題作文からも、文と文の相互のつながりに注意しながら、内容的にまとまりのある一貫した文章を書くことができるようになってきた。

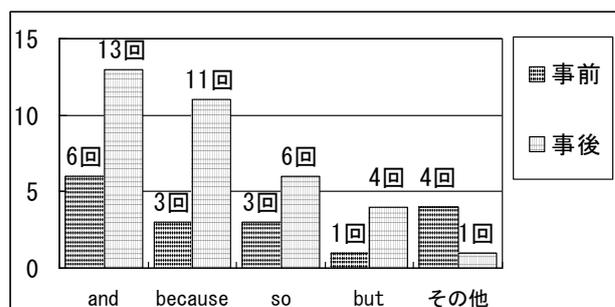


図 14 課題作文における接続詞の使用

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究の成果

検証Ⅰ、Ⅱで示したように、パラグラフ・ライティングの手法を取り入れ、生徒が英語の文章構成を知り、アウトライン作りを通して、文と文の関係に注意しながら内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が身に付いてきた。また、検証Ⅲで示したように、文章のつながりをよくする活動を通して、生徒たちは文章のつながりをよくする言葉を使いながら、結束性の高い文章を書くことができるようになってきた。最後に検証Ⅳで、題材設定の工夫により英語で文章を書いて伝えられることの喜びを味わい、難しくても英語で文章を書くことが好きになったという生徒が増え、英語で文章を書いて伝えたいという意欲につながることができることも分かった。これらの検証結果や事後の課題作文から、生徒が自分の考えや気持ちなどを書く力が高まってきたと言える。

(2) 今後の課題

英語の文章構成に対する知識や英語で文章を書く力は、2回の取り組みで身に付くものではなく継続して取り組んでいくことが大切である。その為に、パラグラフ・ライティングを取り入れた英作文指導を計画的に行っていくことが必要である。また、結束性を高めるための文章のつながりをよくする言葉の指導については、2文以上で表現させることを普段の授業から行っていくことも必要である。最後に、実際に書かせる中で、一人一人にフィードバックしていきながら、文法指導と一体的に行う工夫についても考えていかなければならない。

題材設定の工夫においては、英語で文章を書いて終わりではなく、書いたことが誰かに伝わるという経験を通して、書くことによるコミュニケーションの喜びを生徒が感じられるような活動にしていくことが必要である。

《引用文献》

- 1)2) 文部科学省 『中学校学習指導要領解説 外国語編』 平成20年 開隆堂
pp. 2-3, p. 19
- 3) 大井 恭子編著 『パラグラフ・ライティング指導入門』 2008年 大修館書店
p. 20

《参考文献》

- ・ 田中 武夫・田中 知聡 『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』 2003年 大修館書店
- ・ 大井 恭子 『「英語モード」でライティング』 2002年 講談社
- ・ ケリー伊藤 『英語パラグラフ・ライティング講座』 2002年 研究社